

文化庁

47.9

〈月報〉

昭和47年9月15日 発行

編集 文化庁長官官房庶務課
発行

東京都千代田区霞が関3-2-2

電話代表 (581) 4211

郵便番号 100

—〈第49号〉—

(題字=今日出海 前文化庁長官)

宗達筆雷神図 (国宝紙本金地著色風神雷神図のうち)



- ▽芸術祭主催公演の内容と参加公演きまる……………2
- ▽優秀映画製作奨励金交付制度について……………4
- ▽昭和47年度日本語教育研修会……………6
- ▽昭和47年度図書館等職員著作権実務講習会開催……………6
- ▽沖縄著作権講習会を終えて……………7
- ▽著作権紛争解決あっせんについて……………7
- ▽明治・大正・昭和和名作美術展……………7
- ▽第六回現代美術選抜展……………8
- ▽高松塚古墳応急保存対策調査会中間報告……………9
- ▽文化財建造物修理主任技術者講習会開催……………9
- ▽全国文化財保護研究協議会開催……………10
- ▽第十九回日本伝統工芸展……………10
- ▽集落・町並保存対策研究協議会開く……………11
- ▽第八回国家指定芸能特別鑑賞会……………11
- ▽アメリカ巡回日本名陶百選展……………12
- ▽法人の新設……………12
- ▽文化庁企画・提供テレビ番組……………13
- ▽随想……………13
- ▽国立博物館・美術館だより……………14
- ▽国立劇場十月公演……………16
- ▽文化庁日誌……………16

文化財保護部の美術工芸課と建造物課のばあい、文化財保護委員会の発足当初から専門の技官が課長をつとめるのが伝統になっている。専門的判断を常に必要とするので、これは尊ぶべき伝統である。ところが、ふだんから行政に携わっているとはいうものの、研究職の技官から行政職である課長になった当座は、相当にとまどいをおぼえるのはやむをえない。何より閉口するのは予算の数字で、私など松下隆章さん（文化財保護審議会専門委員、京都国立博物館長）が

課長のころ、予算時期にこちらが出勤して、絵画史の泰斗であるこの美術史家が、無精ひ

随想

技官の課長

倉田文作

して、私にはきわめて不安のたねである。大きな数字になると、いちいち下から数えてみないと安心がならぬ。最後のつめのころ、村山局長のお伴をして大蔵省へむかう除中で、倉田さんとはあとのくらしいの、と局長がきかれた。私はいとも明快に、あと一億ですとおこたえして、さて考えてみると、どうもすこし多いような気持ちにする。暗いところで手控えをさがしてみたら、これが困ったことに一千万なのである。相手がひごろ頭脳の明せきさに心服しているひとだからかなわない。局長、一千万でした、といって私は暗いなかでひそやかに赤面した。村山さんは、度しがたい課長だと思われたにちがいない。三年を経て東京国立博物館に転任するころ、やっと予算がどうにかわかりかけたが、村山さんに対するコンプレックスは、自分なおりそうにない。ただしここにおことわりしておくが、歴代の美術工芸課長のなかでこれほど数字に弱かったのはかく申す私だけである。

(文化財鑑査官)

げにめを赤くしてねむそうな顔をしているのを見ると、因果な星のもとに生まれた学者もいるものよと、お気の毒に思ったものである。ところが、まさしく思いもかけず、自分がそのあとをうけることになった。さらに因果なことには、当時の局長が明敏で知られるいまの村山次官であった。前もって課長補佐の鬼山さんのコーチを十二分にうけながら、数字に関しては何とも自信がない。なにしろ金額の単位が千になっ